

書評：長津一史『国境を生きる——マレーシア・サバ州、
海サマの動態的民族誌』木犀社、2019年2月刊

柴田隆行*

Book Review: Nagatsu Kazufumi (2019) *Living on the Border:
An Historical Ethnography of the Sama Dilaut in Sabah, Malaysia*,
Mokuseisya

SHIBATA Takayuki*

古代ギリシアの国家 (*res publica*) は「公共のことがら」を意味する。現代でも国家は「公」の名において個人の命や財産を奪う権利 (死刑, 戦争, 徴税) を有する。通信・交通網の発達で貿易商社のみならずあらゆる企業が海外進出し, いわゆるグローバル化が進み多国籍企業が増加している。ならばそうした企業は国境を越えインターナショナルに活動しているかと言えばそうとも言えない。「多国籍」企業なるものが各国政府に絡んで公共財を収奪し利益を上げている。ゲノム解析を公的機関で研究させ, その成果は公費によるものだから全面開示せよと迫り, 企業はタダで入手したデータを加工して特許をとり, 高額で政府その他に売りつける, というのは一例にすぎない。

内藤正典『ヨーロッパとイスラーム——共生は可能か』[内藤 2004] によると, 日本では多文化主義を「相互理解の上に多文化の共生を図る思想」だと思える人が多いが, じっさいの日本社会は在日外国人の同化を認めてはいない。戦後ドイツはナチズムの反省から多くの移民を受け入れたが, ドイツ社会も, 一方で彼らの「同化」を求めつつ他方でそもそも「異民族を同化できるという発想」がない。オランダの場合は「他者の生き方を権利として保障する」が, だからと言って他者を理解するわけではない。いわば「見ざる, 言わざる, 聞かざるに徹するルール」を制度化するものとして多文化主義が考えられているにすぎない。この本は2004年刊だが, その後ヨーロッパ諸国はさらに桁違いに多くの移民・難民を受け入れることとなり, 排外主義の台頭が各国で見られるようになった。「見ざる」と言っても見えてしまう異民族増加で建前は崩壊する。

* 東洋大学社会学部; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606 / tamast@toyo.jp

異民族と言うが、民族とは何か。排外主義と言うが、誰が「内」で誰が「外」かは戸籍を調べないとわからないほど欧米は多民族化している。いわゆるドイツがナポレオン軍に侵略された時ドイツには330の「くに」があった。フランスと闘うためにこれら無数の小国を統合せんとしてフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) は、日本語で一般に「ドイツ国民に告ぐ」と訳される題の講演“Reden an die deutsche Nation”を行ったが、ここで言う deutsche Nation に含まれる人の範囲はどれほどか。それを具体的に明示したのがグリム兄弟であり、彼らは deutsche Nation の徴表を「ドイツ語を話す人」とした。ハプスブルク家は、ルドルフ一世が1273年にローマ・ドイツ王 (römisch-deutscher König) に選出されて以来700年の権勢を誇ったが、オーストリア人が話す言語はいまでも「ドイツ」語である。言語が Nation の重要要因になりうるとしても、Nation は一「国家」の民ではないので、これを「国民」と訳すのは適切でない。

本書の「はじめに」を読み徒然に思ったことを記した。本書冒頭で、21世紀はボーダーレスの時代になったはずなのに移民規制に乗り出しているEU諸国について言及されていたからである。ただし、本書の主題は、マレーシア・サバ州とフィリピンとの国境海域に住む海サマを名乗る人たちが、国境を越えて島々を往来する暮らしをフィールドワークに基づき調査することで、国境の意味を具体的に考えることにある、という。

線引きの難しい海の世界で営まれてきたかれらの生活は、一見すると、国家や国境とは無関係なようにみえる。そうした人びとを対象として、なぜ国家や国境との関係を問題にするのだろうか。

この問いを解明するために著者は当地で調査を始めた、のではない、と著者は言う。むしろ調査を始めてからのフィールドで「発見」された問いであるという。1990年代以降の東南アジア研究では、「国境周辺を生きる人びとのような周縁社会から、国民統合やナショナリズム、経済開発、さらにはグローバル化を捉え直し」、「オルタナティブな国家経験を探ろうとする論考が増加」した。そうした研究動向のなかで、著者はとりわけ「国境社会と国家との相互作用とそのダイナミクス」に目を向け、「近代国家と対峙する人びと」として海サマを描くことを目指したという。

本書は、「研究の視点と立場を整理した序章、フィールドワークについて説明した一章、本論部分にあたる10の章、および結びの章で構成される。」本論は、第1部を「民族の生成と再編」として、「海サマとはどのような人びとなのか」「スル海域とサバ州の歴史過程——民族の生成を中心に」「民族表象の変容——海賊、漂海民、イスラームの守護者」が論じられ、第2部は「開発過程と社会の再編」として、「地域社会の分断と政治的権威の再編成——国

境の町センポルナ」「海上集落の構成と歴史——調査地カッロン村の概況」「開発と国境——『先住性』の政治と海サマ社会」が、第3部は<イスラーム化と宗教実践の変容>として、「サバ州におけるイスラームの制度化と権威——法・行政・教育」「『正しい』宗教をめぐるポリティクス——海サマのイスラーム化と国家」「海サマの信仰と儀礼——イスラーム化にともなう宗教実践の変容」「儀礼の変化——初米儀礼と死者霊儀礼をめぐる」がそれぞれ論じられている。

なお、本書は、2005年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出され学位が受理された博士論文がもとになっているが、その後、とりわけ「調査地域に劇的な変化」すなわち、政治的变化、調査地の火災、人口移動等があったという。そうした変化をどこまでこれまでの研究とつなげるかは難しい問題だが、本書では基本線は維持されつつ変化後の様子も一部本論に取り込まれている。註においても細かな説明が加えられており、時代性と現在性がともに失われず見事に調和されており、著者の文章構成力の卓越さがうかがえる。

本書の圧巻は、多々あることは言うまでもないが、私見では、175ページに掲載されている図6-1「カッロン村鳥瞰図」である。著者が初めて海上のカッロン村で調査を始めた時、グーグル・アースもドローンもまだ存在せず、海上ゆえ三角測量等も不可能だったため、長さ10mのメジャーと高性能方位磁針で距離と方角を測って自ら白地図を作成し、村全体644世帯を含む地図を作成した、というその図である。調査助手とともに約1ヶ月半かけて地図を完成させることで、大半の村人に顔を憶えてもらえたという副産物を得た。村長らも知らない非正規滞在者を含むほとんどの村人に顔を知られ、「どの地区でも、少なくとも相手が不安を覚えない程度には、話を聞くことができ」、いわば「村入り」を許されたというエピソードとともに、そうして得られた調査結果を文章で読む私たちは、この1枚の地図を眺めているだけでも人びとの暮らしや思いが目に浮かぶ恩恵に授かることができる。逆に言えば、自ら手作りのこの地図がその後の調査でフル活用され、そのために説明がより具体的、立体的に仕上げられていると言える。この地図が海上の村の地図であって、どこでも自由に歩いて行ける一般的陸上集落の地図ではないことの凄さは、その次のページに掲載されている写真を見て改めて実感させられる。

形式面しか取り上げていないうちに紙数が尽きそうなので、豊富な内容を持つ本書の論述から1点だけ評者による注目点を挙げておきたい。本書は『国境を生きる』というタイトルを持つことから明らかなように、「国境を生きる海サマの社会文化変容をより多元的、複合的な現象として描く」こと、「ひとつの国境社会の変容をこうした〔政治経済のみならず文化ないし精神の領域にまで介入する〕包括的な視点で捉え、その歴史過程のダイナミクスをフィールドでの参与観察をもとに論じること」が課題とされる（「はじめに」より）。具体的な一例として、著者はカッロン村で193世帯を対象に悉皆調査を行い、性別、年齢、出身地、居住地、

学歴、生業、等での相異点ないし格差を明らかにしているが、そこから特に国籍保有者と非国籍保有者の違いに注目している。カッロン村のある、マレーシア・サバ州センボルナの非国籍保有者は3万6761人、総人口の3割強という。後者が経済的にも社会的にも下位にあることは想定内であろう。問題は、ここが海上の村であることにある。かつて鶴見良行らが「国境なき自由な海の民」と見た人びとを本書の著者は「国家と対峙しながら国境を生きる人びと」として描くことを意図する（「はじめに」）というのであれば、国家との関係、具体的には格差を生む原因の1つとなっている国籍がどのようにして住民に付与されているかが知りたいところである。著者によれば、非国籍保有者の多くは、1970年代以降にスル諸島から移住したサマとタウズグであると考えて良いという。1990年代に著者がここで調査を始めた頃、センボルナとシタンカイのいずれの側でも出入国管理局の審査部門が設置されておらず、両地域の海を渡る往来は違法であったにもかかわらず、フィリピン側でも国境警備がほとんど機能していなかったため、「海サマのような零細漁民の国境を越える移動は黙認されていた」という。そうであるならばなお、どのような経緯で国籍授与がなされたか、選別の基準は何かなど法制度面での追跡があると理解の助けになると思う。

なお、1998年に「国籍を持たない海サマに特別な在留資格を認める」レパ身分証明書なるものが登場し、さらに2005年の調査時には「出入国管理局が発行する正規の身分証明書ではなく、郡役所の原住民部門で作成された『バジャウ・ラウト民族証明書』なるものができたという。しかも、「バジャウ・ラウト」は、かつて村内格差の新たな基準となりつつあった「先住」「移民」という区別を問わず、「海サマの名乗り」に転化しつつあった」という。そういう動きがどのような住民の意識や生活、ないしは政治や経済の展開から生じたのか。これは本書の主たる調査時期以降の動きであるから、その答えをここで求めるのは無いものねだりであるが、いつか詳しく教えていただきたい、重要な変化であると思う。

ところで、話が跳ぶが、モンゴルと南シベリアの間に1921年から23年間だけ独立国であったトゥバに潜入したオーストリアの民族学者メンヒェン・ヘルフェン（Otto Mänchen-Helfen）が書いた『トゥバ紀行（Reise ins asiatische Tuwa）』という本が田中克彦氏により和訳され岩波文庫で読むことができる。これによると、少数者が使う地域言語が消える過程が青少年の教育によるものだということがよくわかる。ふだん使っている土着言語だけで教育を受けたら将来せいぜいその村の長になれるだけだが、たとえ長になっても貧困から抜け出すことができない。もう少し広い世界で活躍しようと思ったら、多数派の言語教育を受けなければならない。さらに安定した職業に就くか少しは物質的に豊かな生活をしたいと思ったらロシア語ができなければならない。お誂え向きに、優秀な青少年のための留学制度が用意されている。かくして地域の優秀な青少年は次々とロシア化され共産党黨員となって地域支配に従事することになる。ここで紹介できなかったが、サバ州のイスラム化にも多少それ

に似た傾向があるようだが、本書によると、そうした流れに抵抗し自立を確保する動きもあるとのことで、興味深い。この点についてもさらに本書を熟読しつつグローバル化世界の推移に注視してゆきたい。

参 考 文 献

内藤正典

2004 『ヨーロッパとイスラーム——共生は可能か』岩波書店.

メンヒェン＝ヘルフェン

1996 『トゥバ紀行』田中克彦（訳），岩波書店.